

ど

うしても体験しておきたい建築があつて、昨年、シアトルを訪れた。レム・コールハースの率いるOMAの手がけた中央図書館（2004年）である。

外観は、菱形のフレームに覆われた巨大な不整形のオブジェといったおもむきだ。いわゆる正面はなく、内部のプログラムの構成がそのまま立ち現れている。激しく傾いた大きな台形のガラスの面が何枚も組み合わさって、ヴォリュームをつくりあげている。20世紀のもつとも重要な建築家がル・コルビュジエならば、コールハースは間違いなく、彼に続く重要な存在だろう。雑誌や作品集の写真でよく知っていたとしても、現地ですべて実感できることがある。その建物のまわりの風景だ。シアトル中央図書館の場合も、坂だらけの街であることが大きな意味をもつ。ここでは海への下り坂が方向の感覚を与えてくれる。大地がそもそも傾くために、異様に思われた斜めの

かたちも、意外と不自然ではない。実際、坂の途中にある図書館は、5番街と4番街のあいだのおよそ2層分の高低差を吸収している。室内に入っても、4層にわたって続くブックスバイラルの書架など、空間がさまざまな方向に傾斜している。つまり、ストリートの感覚を延長した情報の建築なのだ。

興味深いのは、インターネットの時代において、コールハースが公共空間としての図書館の役割を再定義していることだ。

5番街に面する3階の「リビングルーム」は、都市の広場をかねた大きな空間である。外構にある草木は、拡大されたグラフィックのパターンとして床面のテキスタイルに展開する。エスカレーターに仕掛けた現代美術家のトニー・アウスラーによる顔の映像アートも楽しめる。市民が思い思いにくつろいでおり、名称通り、都市の「リビングルーム」が発生している。ネットにも接続できる。とくに

タダで使える無線LANのサービスは、日本の図書館では普及しているとは言いがたい。そして坂道を降りた4番街と面する1階には、子供や多言語利用者のための施設が入る。

日本のマンガ喫茶は独自の発展をとげたが、あくまでも課金される商業空間である。だが、コールハースは、アメリカの図書館において公共空間が切り詰められる現状を分析したうえで、高さの違う都市空間を縫い合わせる結節点と

シアトルの新しい図書館公共空間

@Seattle

して、屋内化された公共の場を提供する。シアトル中央図書館では、ここが表でここが裏というヒエラルキーはない。そして本のもとに人が集まる楽しさを改めて教えてくれる。



写真提供：筆者

をちこち散歩

五十嵐太郎

いがらしたろう

建築史家、東北大学准教授